

Immediate Press Release 2014.2.21

幸福はぼくを見つけてくれるかな？

石川コレクション（岡山）からの10作家

Will Happiness Find Me? 10 artists from the Ishikawa Collection, Okayama

謹啓 向春の候、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は東京オペラシティ アートギャラリーの展覧会活動について格別なご高配、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、アートギャラリーでは2014年4月19日〔土〕より6月29日〔日〕まで、展覧会「幸福はぼくを見つけてくれるかな？ — 石川コレクション（岡山）からの10作家」を開催いたします。

アートが私たちがひきつけてやまないのは、色やかたちや素材といった目に見える「もの」の魅力だけではなく、その背後にある意味や考えが、見る者にさまざまな問いをもたらすからではないでしょうか。本展で紹介する10組のアーティストは、私たちがとりまく現代の問題（誰もが感じることはあるが、見過ごしてしまうようなこと）に立脚した制作を続けています。都市と自然、個人のアイデンティティと歴史、アートとは何かという問い — アプローチはさまざまですが、彼らの作品は、それらの個人的経験を見る者が自身に置きかえて深いレベルで共有することを可能にします。出品作家の多くは日常に目を向けながら、その視点をずらしたり置き換えたりすることで、私たちに新しい世界の見方を示してくれます。それは、やがて作品を見る私たち自身の問いかけそのものへと変わるでしょう。

本展はコンセプトualな作品を多く収集するコレクター石川康晴氏のコレクションより、国際的に注目を集める10組のアーティスト、ミルチャ・カントル、オマー・ファスト、ペーター・フィッシュリ、ダヴィッド・ヴァイス、ライアン・ガンダー、リアム・ギリック、ピエール・ユイグ、小泉明郎、グレン・ライゴン、島袋道浩、ヤン・ヴォーの作品を紹介します。

謹白

【開催概要】

展覧会名： 幸福はぼくを見つけてくれるかな？ — 石川コレクション（岡山）からの10作家
Will Happiness Find Me? 10 artists from the Ishikawa Collection, Okayama

会期： 2014年4月19日〔土〕–6月29日〔日〕

会場： 東京オペラシティ アートギャラリー

開館時間： 11:00–19:00（金・土は20:00まで／最終入場は閉館の30分前まで）

休館日： 月曜日（ただし4月28日、5月5日は開館）

入場料： 一般1,000（800）円／大・高生800（600）円／中・小生以下無料

* 同時開催「特別展示 舟越保武・長崎26殉教者 未発表デッサン」、「project N 56 三井淑香」の入場料を含みます。

* 収蔵品展（特別展示）入場券200円（各種割引無し）もあり。

*（ ）内は15名以上の団体料金。その他、閉館の1時間前より半額、65歳以上半額。

* 障害者手帳をお持ちの方および付添1名は無料。割引の併用および入場料の払い戻しはできません。

お問合せ： 03-5777-8600（ハローダイヤル）

ウェブサイト <http://www.operacity.jp/ag/exh163/>  <https://www.facebook.com/tocag>

主催： 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

協賛： 日本生命保険相互会社

協力： 石川コレクション（岡山）、TARO NASU

空間デザイン： 横田歴男建築設計事務所

■本リリースに関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 佐山 福士 【広報担当】 吉田

Tel:03-5353-0756 / Fax:03-5353-0776 / Email:ag-press@toccf.com



ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY

展覧会について

「幸福はぼくを見つけてくれるかな？」は、本展の出品作家ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイスの作品から引用しました。幸福とは自分で見つけるもの、誰もがそう考えるでしょう。しかしここには幸福が私たちを見つけてくかもしれないという視点の変換がみられます。人生に見出すわずかな希望・・・？やるせなさを感じさせるひと言にもとれますが、誰の心にも浮かぶ小さな問いかけをそのままにせず、何気ない日常をさまざまな角度から見つめることで新たな世界の見方は開けるのではないのでしょうか。本展がより多くの方にとって現代美術と出会う場となることを願い、このタイトルをつけました。

原文はドイツ語で Findet Mich das Glück? 日本語は2010年に金沢21世紀美術館での個展で展示された作品《質問》(2000-2010)のために酒寄進一氏によって翻訳されたものです。この言葉は2011年に FOIL より出版されたペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイスのアーティスト・ブックのタイトルにもなっています。

出品作家と作品

ミルチャ・カントル Mircea Cantor (1977-)

オラデア（ルーマニア）生まれ、パリ在住。写真、彫刻、インスタレーション、映像など表現方法を限定することなく制作するカントル。横浜トリエンナーレ（2011）に出品された、女性たちが真っ白な砂の上を輪になって箒で前の人の足跡を消しながら歩み続ける映像作品《幸せを追い求めて》は記憶に新しい。ユーモアを感じさせながらもアイロニカルで、見る者の心理に不安定な状況を作り出す。本作では作家自身の息子がたどたどしい英語で「僕は世界を救わないことにきめた」と繰り返す。意味のわからないまま言葉を発しつづける幼い子の無邪気さと、シリアスな言葉の意味の対比は世界が抱える複雑な問題を予感させる。

オマー・ファスト Omer Fast (1972-)

エルサレム生まれ、ベルリン在住。オマー・ファストは一貫して映画の手法によるストーリー性の強い映像作品を制作してきた。一つの映像をバラバラにして組み替えるカットアップや、複数のカメラによる多角的な視点によって、個人の体験や記憶、歴史がどのように作られてきたのかを見る者に問いつける。本作ではドイツ人の夫婦が戦地から帰還した息子を出迎え、自宅で夕食を共にするまでの場面が描かれる。だが同じストーリーが何度も繰り返され、そのたびに息子は新しく入れ替わる。本作は5年に1度ドイツのカッセルで開催される国際美術展ドクメンタ13(2012)で大きな話題を呼んだ。「コンティニュイティ」（連続性）とは、映画の編集でもちいられる技術的用語でもある。

ライアン・ガンダー Ryan Gander (1976-)

チェスター（イギリス）生まれ、ロンドン／サフォーク（イギリス）在住。ガンダーは日常の中のささいな事象について深く探求し、それらの意外な組み合わせから生じるズレによって、隠れた意味を想像させる。《マグナス・オパス》はラテン語で「最高傑作」の意。人感知センサーで動く目玉と眉が会場で作品を鑑賞する人々の動きを追いかけ、見つめる。鑑賞者と作品を逆転させ、美術館という場における作品と鑑賞者の関係に問いを投げかける。



ミルチャ・カントル 《僕は世界を救わないことにきめた》
ビデオ
2011
Courtesy the artist and Yvon Lambert, Paris



オマー・ファスト 《コンティニュイティ》
ビデオ
2012
Courtesy the artist, gb agency, Paris, Arratia, Beer, Berlin, Dvir Gallery, Tel Aviv
Image: Philip Wölke



ライアン・ガンダー 《マグナス・オパス》
アニメロニクス、センサー、コンピュータ
2013
©Ryan Gander, Courtesy the artist and TARO NASU
Image Martin Argroglo



リアム・ギリック 《任意空間》
テキスト、ビニール
2004
©Liam Gillick, Courtesy the artist and TARO NASU
photo: KIOKU Keizo

リアム・ギリック Liam Gillick (1964-)

アリスバリー（イギリス）生まれ、ロンドン／ニューヨーク在住。1960年代のミニマルアートを思わせる立体や、抽象的な言葉を壁一面に配置する作品で知られるギリックは、1990年代に注目を集めた YBA（ヤング・ブリティッシュ・アーティスト）の一人である。彼の制作の根底には美術作品が人々にどう作用するかへの関心があり、リレーショナル・アート（ものごとや人同士の関係性を作品とする芸術）の代表的な作家の一人でもある。《任意空間》はフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの著作『シネマ 1』に記された概念であり、ギリックが参加した2008年グッゲンハイム美術館（NY）でのグループ展のタイトルでもある。本展では壁面いっぱいに「The anyspace whatever…」の文字が配される。



ピエール・ユイグ 《未耕作地の風景》
ビデオ
2012/2013
©Pierre Huyghe, Courtesy the artist, Esther Schipper, Berlin,
Marian Goodman Gallery, New York / Paris

ピエール・ユイグ Pierre Huyghe (1962-)

パリ生まれ、パリ／ニューヨーク在住。映像、音楽、建築、デザインといった様々な領域を横断するユイグは、アートや展覧会の定義を問い続けてきた。国際美術展ドクメンタ13で発表した《未耕作地》では、カールスアウエ公園の中に様々な生物が独自の生態系を営む「場」を作り出した。アートと自然が入り交じるそこは、フィクションと現実の境界の曖昧な世界である。ピンク色の脚の犬が歩き回り、頭部が蜂の巣で覆われた大理石の裸婦に働き蜂が集まる。植物、蟻塚、水中の生物・・・すべてが生を営み、死に、また新たな生命が誕生する。《未耕作地の風景》はその記録といえる映像作品である。



小泉明郎 《僕の声はきっとあなたに届いている (シングル・スクリーン・ヴァージョン)》
ビデオ
2009
Courtesy Annet Gelink Gallery, Amsterdam

小泉明郎 Koizumi Meiro (1976-)

群馬県生まれ、神奈川県在住。小泉は、人間の記憶やトラウマなどの問題を、人間心理への洞察を通して問う作品で国際的な注目を集めている。本作は、携帯電話で母親に電話をかける若い男性の姿を追う映像作品。一見都市の中で垣間見る情景だが、後半において、通話の相手の声とともに映像が反復されると、見る者を当惑させる事実が判明する・・・。コミュニケーションのすれ違いや人間の感情がいかにかたやすく操作されるものであるかを目の当たりにして、見る者の感情移入という予定調和は見事に打ち碎かれるだろう。



グレン・ライゴン 《ストレンジャー #67》
オイルスティック、炭塵、ジェツツ、キャンバス
2012
©Glenn Ligon
photo: Ron Amstutz

グレン・ライゴン Glenn Ligon (1960-)

ニューヨーク生まれ、ニューヨーク在住。アフリカ系アメリカ人であるライゴンは、さまざまな分野から引用した言葉をもちいた作品で知られる。本作は、アフリカ系アメリカ人の J・ポールドウィンによる1953年のエッセイ「村の異邦人」からの引用による。石炭生産で発生する産業廃棄物の炭塵（たんじん）によって繰り返し描かれたテキストは厚い層となってなかば判読不能である。それは白と黒、光と影といった相反するものへの意識や、マイノリティとしての自らをとりまくディスコミュニケーションへのもどかしさが塗り重ねられた抽象絵画のようである。大国アメリカの人種や歴史、アイデンティティへの問いに、言葉とイメージをめぐる問いが重なる。



島袋道浩 《わけのわからないものをどうやってひきうけるか?》
ビデオ、テキスト
2006/2008
©Shimabuku, Courtesy the artist, Berlin
photo: Shimabuku

島袋道浩 Shimabuku (1969-)

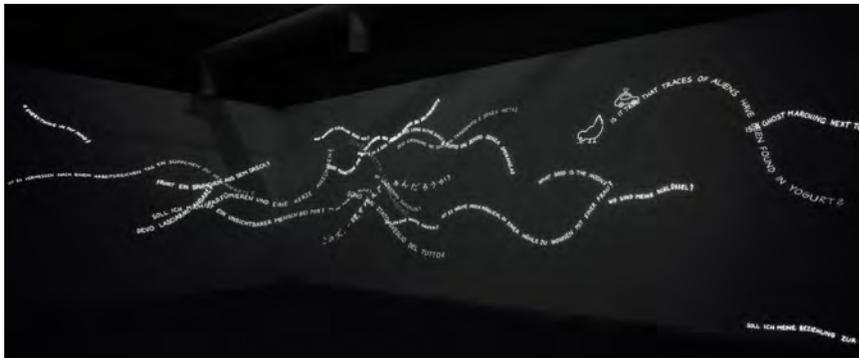
兵庫県生まれ、ベルリン在住。島袋は、世界を舞台に地域固有の文化や人々との出会いとコミュニケーションをプロジェクトとして実践し、そのなかから写真、映像、音声、オブジェなどさまざまなメディアによる作品を制作している。本作は、ドイツ人の学生が、日本語の歌を歌詞の意味のわからないまま歌い続けるユーモラスな映像作品。「わけのわからないものをどうやってひきうけるか?」は、島袋自身の活動のテーマであるばかりでなく、現代における美術との向き合い方、あるいはコミュニケーションに悩み、難しさを感じる私たちすべてへの問いかけでもあるだろう。

ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイス Peter Fischli (1952-) David Weiss (1946-2012)

P・フィッシュリ:チューリヒ生まれ、チューリヒ在住、D・ヴァイス:チューリヒ生まれ、チューリヒにて没。フィッシュリとヴァイスはチューリヒを拠点として1979年より共同制作を開始する。自ら着ぐるみを着てネズミとクマに扮し、人間社会の不条理を映し出す作品でも知られ、日常の視点にユーモアとアイロニーを織りまぜながら、新たに生まれる意味や価値を問う。本作は15台のスライドプロジェクターによって、日、独、仏、伊4カ国語のさまざまな質問が壁面いっぱいにランダムに映し出される。何気ないつぶやきから、生きることの本質に触れる哲学的な問いまで、見る者が答えを見出す間もなく次々と浮かび上がっては消える。

ヤン・ヴォー Danh Vo (1975-)

バリア=ブンタウ省 (ベトナム) 生まれ、ベルリン在住。ヤン・ヴォーは、植民地主義の爪あとやベトナムのポートピープルという自らの出自をラディカルに投影した作品によって注目を集めている。一連の出品作は、ベトナム戦争の政策決定をしたケネディ米大統領らの遺品や、和平交渉会場のシャンデリアなどをオークションなどを通じて入手し、そのまま、あるいは解体して提示するもの。ヴォーが扱う歴史の断片は、政治や文化的アイデンティティといった人類全体の問題を呼びおこし、壮大なスケールの作品へと変貌をとげる。



ペーター・フィッシュリ ダヴィッド・ヴァイス《無題》
スライドプロジェクション
1981-2001
©Peter Fischli David Weiss, Zürich 2014,
Courtesy Sprüth Magers Berlin London, Matthew Marks Gallery, New York, Galerie Eva Presenhuber, Zürich



ヤン・ヴォー 《ロット20:ケネディ政権の閣議室の椅子2脚》
(関連図版)
photo: Danh Vo

東京オペラシティアートギャラリーの2014年度のラインナップが決まりました

今年9月に開館15周年を迎える東京オペラシティアートギャラリー。2014年度もユニークな現代美術や、絵画を中心にしたグループ展、話題の建築家や、デザインを包括的に紹介する展覧会が続きます。どうぞご期待ください。

2014年4月19日 [土] - 6月29日 [日]

幸福はぼくを見つけてくれるかな? - 石川コレクション (岡山) からの10作家

同時開催: 特別展示 舟越保武:長崎26殉教者 未発表ドローイング / project N 56 三井淑香

2014年7月12日 [土] - 9月21日 [日]

絵画の在りか

同時開催: 収蔵品展048 水のイメージ / project N 57 塩川彩生

2014年10月18日 [土] - 12月23日 [火・祝]

ザハ・ハテイド

同時開催: 収蔵品展049 抽象の楽しみ / project N 58 高島依子

2015年1月17日 [土] - 3月29日 [日]

スイス・デザインの150年

同時開催: 収蔵品展050 木を彫る / project N 59 河合真里



ARTGALLERY
TOKYO OPERA CITY